

方々歩いて旅すれば

いろいろな出会いと

発見がある。

見て聞いて歩いた

まちの旅日記。

まちを歩く
vol.8

9月に「ヨドコウ迎賓館」を訪れる……という京都鴨川建築塾主催の集いに参加することになった。建築家「ライト」について、私の愛する「脳」はまったくその影すら残していない。とりあえず、町の図書館へ向かった。ここで全てをこなせるなんて思っていない。どれほどの情報があるのかを知つておくために数日を消化、友人から借り集めた資料をもあわせ「F・L・ライト」について調べてみた。熟知しているわけではないが、西洋建築よりも日本建築のほうが馴染む生活をしてきた私にとって、何とも「苟の重いレポート」

今を生きるフランク・ロイド・ライトの「ヨドコウ迎賓館（旧山邑家住宅）」

兵庫県芦屋市

文・写真＝岡部知子

になってしまった。

今回は「ヨドコウ迎賓館」で館長を務める柴田直義（70）さんにお話を伺うことができた。灘の酒「櫻正宗」8代目、山邑（やまむら）太左衛門が別邸として発注。基本設計が出来て5年後に着工、約1年をかけて竣工（1924年）した。

「灘五郷」といえば日本酒の銘地。樽廻船と呼ばれた船で江戸はもとより、各地に酒を卸し、「五郷の酒蔵」の勢いは相当なものであった。アメリカ建築家F・L・ライトが帝國ホテルを手がけたことは当然のように知れ渡っていた。当時の日本政府が、欧米向け経済拡充の一端として「帝國ホテル」建設の後押しをしていた。国営港を背景に経済動向を睨む神戸の実業家が「F・L・ライト」に建築設計を依頼するのに時間はかかるなかつた。神戸の「ハイカラ」は今現在でも色濃く残っている。終戦後のしばらくは進駐軍の社交場として使われていた「山邑邸」を淀川製錬所が買取、12年間は社長公邸として使用した。その後米国人家族に賃貸され、1974年に国の重要文



▲食堂から眺めるバルコニー。煙突でさえデザインの一部



▲館長の柴田直義さん

化財指定を受けるまでの約3年は独身社員の寮として使用された。何とも優雅な話である。これでは社員の婚期が遅れてしまう……というわけではなく、国の指定を受けて7年後、その調査工事が始まったのである。

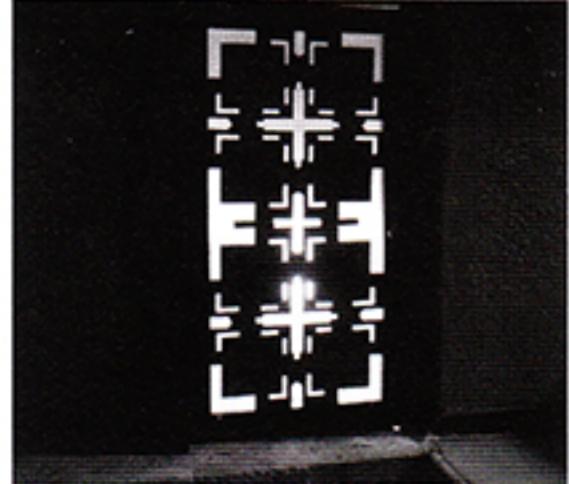
文化財の改修には条件が付いている。「建てられた時代の材料・技法で修復されなければならぬ」のである。1924年に竣工したこの「芸術作品」は、調査されるまでの約60年間に15cmも沈下していた。そのため西側・南側斜面に擁壁を作り補強する必要があった。結果、この手当てが阪神淡路大震災における被害拡大を減少させたといえる。そのときの改修費用は、国・県・市・事業主負担をあわせ2億2千700万円。調査工事が始まって修復完成まで約7年が流れていた。その後、記憶にも生々しい大震災で被害を受けてしまった。クラックは建物全体に及び、伸びたクラックはベランダまで走り、崩れ落ちていた。しかし、すべての壁がコンクリートだと思われていた壁の30%が竹小舞をかいた壁で出来ていたのである。この話を伺つただけで私の気持ちは晴れていった。しかし、ダメージは深く工事に3年、修復金額は5億4千万円を要した。柴田さんはこれに合わせるように館長として赴任した。淀川製錬時代とは大きく違つた仕事内容に一抹の不安はあったが、子育てを卒業させていた奥さまが10年前からここ迎賓館で勤務させていたのである。同じ職場に夫婦で働く……。人によれば「とんでもない！」と言う声が聞こえてきそうであるが、柴田家は違つた。どこに行くのも一緒、ライトの故郷へも同行した。毎朝、弁当を2つ作つて出勤している……らしい。とつておきのエピソードはありませんか？　の問い合わせに答えてくれた。

「この建物のすぐ上に300坪ほどのお屋敷があつたのですが、先の震災で倒壊してしまったのです。地主さんは売ろうとして役所へ書類を提出したのですが、マンションでも建てられては大変！」と役所内会議で「公園」として役所が買上げてくれたのです」とにこやかに話してくれた。しか

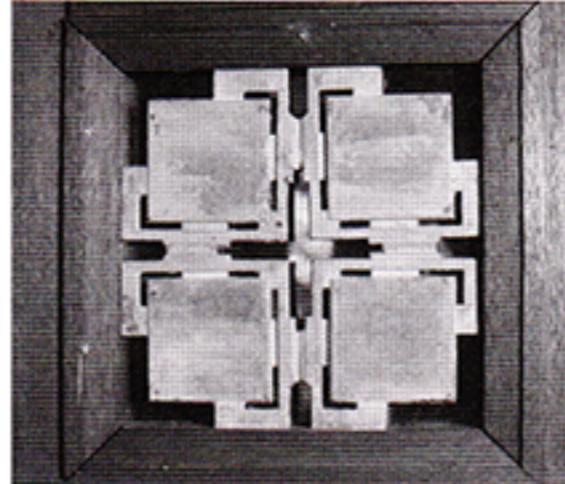
し、スカツとする話である。（通はゴロゴロあるのにネ）



▲大谷石がいかされた3階食堂出入口



▲2階へ行く階段のフットライト



▲2階ドアの明り取り



▲建物を眺めながら行くと一番奥にあるのが玄関

ハイ！ これからが苦手ジャンルに突入。フランク・リンカーン・ライトは1867年6月8日、ウイスコンシン州に生まれた。南北戦争の終了した2年後である。母親のアンナと父親のウイリアムの夫婦仲は相当悪かつたらしい。このことは概ねの出版物に書いてある。がしかし、子供は出来た。ライトである。父親ウイリアムは結構多彩な能力を持つた人物であったが、日本でいう「器用貧乏」という症状。肩書きに「音楽家・教育者・政治家・牧師」と並んでいたらしい。日本であれば「政治家」だけで……。稼いでこない夫にやりきれない不満をいつも抱いていたアンナは欠落した夫の空しさの分、息子のライトに向けていった。幼児期から「おまえは、建築界の巨匠になる運命である」と言い聞かされて育った。言いながら、

▲装飾性の高い四階の食堂



▲2階応接室で柴田さんの説明を聞く参加者

息子のライトが信じる以前にアンナが信じ込んでしまっていたと思う。

「洗脳」というか、これは子育ての手段としては有効であるかも知れない。ただし、「無謀」という単語が紙一重にある。父ウイリアムも頑張つたと思うが結果が出せない……。「鳴かず飛ばず」の毎日。耐え切れず夫のウイリアムが離婚申請書を残し、家を出た。1884年の冬であった。母と暮らすことを余儀なくされたライトはこの時点から、ミドルネームが「ロイド」となった。

1871年シカゴの大火灾。この直後から復興にシカゴは建築ラッシュで沸いていた。1887年、ライトは名の売っていた「ルイ・サリバン事務所」に移籍した。ライト20歳であった。サリバンとのコンビは順風満帆であった。そのころ、シカゴ出身17歳のキャサリン・トビンと出会い結婚。サリバンに資金を借りてオーフパークに新居を建てた。子供も6人設け、問題なしの生活……と思われていたが、ライトはもてにモテタ！ 男子もてれば金がいる！ サリバンに内緒で住宅のアルバイトをするが、1893年これがバレて解雇されてしまった。その後、自身の設計した住宅の主、エド温・チエニーの妻ママーと恋仲になり、町中のうわさになってしまった。妻のキャサリンは気づかないふりを続けたが、1908年ライトが離婚届を持ってきた。しかし、これを拒否し続けていたが、ライトは何のアクションもなしに事務所を閉鎖、妻と6人の子供を捨てママーと共にヨーロッパへ高飛びしたのだ（ああ～腹が立つ）。

1910年にライトは一人で帰ってきた。やり直しを望む妻を拒否、スプリング・グリーンに住宅を建て始めたのだ。「母親のための家」といつていたがヨーロッパに残っているママーと住むためであった。周知の「タリヤセン」のスタートである。その後も遍歴は続く、彫刻家ミリアム・ノエル。バレリーナのオリガバンナなどなど……公式でもこれだけあるのだ。「仕事の出来る男はモテル……」ああ～悔しい！

おかげ・ともこ